

# 雛祭りの歴史

## 脇田温泉雛祭り・芸術祭 実行委員会

澤田憲孝

090・1347・8366  
0949・32・8470

宮若市芹田146-1

## 雛祭りの歴史 澤田憲孝

以下は第13次原稿です。ミスは澤田090・1347・8366又は0949・32・8470までご連絡下さい。なお異説・概説等が多い事を御了承下さい。コピー禁止・版権は脇田温泉雛祭り・芸術祭実行委員会に属します。下線は難字の読み方。1pは1ページの略。参考資料は略符号で記述。後述インターネット部分等については一部変更や略があります。読みやすい様に、参考資料・難字等を先に記します。

**\*参考資料1：** 1：新編日本人形史（史：と略す） 山田徳兵衛著・絶版。人形全般にわたり記載・様々の古文書等の記載等学術的な本。2：雛祭り（祭：と略す） 福田東久著。一般向け・観光ガイド教書として最適。3：柳川観光協会案内パンフ。4：インターネット：インターネットされない関係者のためここに転載しました。雛関係者から愛好者まで様々あり、記載内容について一部問題も感じるが取り上げています。5：雛の宴（宴：と略す） ひいなのおうたげ。写真多様・わかりやすい。一般向け解説書。6：日本全史 講談社。7：ビジュアル日本史。8：雛人形と武者人形（武：と略す）：林駒御夫・大橋弼峰著：写真中心で御殿かざり・京風に詳しい。人形の制作過程やおさめ方も詳しい。9：現代こよみ辞典・岡田芳郎・阿久根末忠 共著。10：人形小辞典：日本人形協会。11：雛祭り雛めぐり（めぐりと略す）：文化出版局。

### **\*参考資料2：** 漢字読み方等

1 袴かみしも 2 内裏だいら・禁裏 3 束帯・衣冠・直衣のうし・狩衣。3 袴はかま 4 有職雛ゆうそくびな 5 雅みやび 6 雪洞ぼんぼり 7 鉄漿おはぐろ 8 高杯たかつき 9 囃子はやし 10 五人囃子：太鼓・大鼓・小鼓・笛・謡うたい。 11 常磐津ときわす 12 八楽人 笙しょう・箏ひちりき・竜笛りゅうてき・琴・琵琶びわ・鞆鼓かつこ・鉦鼓しょうこ・太鼓。 13 沓くつ 14 衛士えじ 15 石橋しゃつきょう 16 猩猩しょうじょう 17 汐汲しおくみ 18 厄除け・やくよけ 19 御厨子おずし 20 貝桶かいおけ 21 箆笥たんす 22 漆うるし 23 蒔絵まきえ 24 天勝あまがつ 25 這子ほうこ 26 祓い はらい 27 襦みそぎ 28 巳み 29 五節句：29-1 人日じんじつ1月7日：七草の節句。 29-2 上巳じょうし・じょうみ：3月3日：雛の節句・桃の節句・宴を節会せちえ・節供せちく。 29-3 端午の節句：5月5日・菖蒲しょうぶの節句・あやめの節句。 29-4 七夕・7月7日・七夕まつり・星祭り。 29-5 重陽ちょうよう・9月9日・菊の節句。 30 熨斗紙のしし 31 胡粉ごふん 32 店たな 33 蒔絵まきえ 34 泊押はくおし 35 屏風びょうぶ 36 綸

子りんず 37 刺繡ししゅう 38 落雁らくがん 39 穢けがれ 40 蜷  
 しじみ 41 端午の端：はじめ 五月の初め 42 菖蒲しょうぶ 43 蓬よ  
 もぎ 44 丁子ちょうじ 45 沈香じんこう 46 簪かんざし 47 鎧兜よ  
 ろいかぶと 48 鯉幟こいのぼり 49 粽ちまき 50 田螺たにし 51 焙  
 烙ほうろく 52 常節とこぶし

## 雛の歴史

- \* 周の靈王蓬餅を戦勝記念とする。蓬は厄を祓う薬草で造血効果も高い。元は母子草。これが蓬餅さらに江戸時代に桜餅と変化し雛祭の時供えられ食されるようになった。
- \* 陰陽五行説中国で生まれる。
- \* 周の時代・厄落とし・蘭草で穢れけがれを祓うはらう・魏の時代3日に行う。
- \* 縄文時代：土偶・埴輪：人形・雛人形のルーツ。土人形・泥人形・素焼き人形・現在まで続く。
- \* 民間信仰「ひとがた」を作り、息を吹きかけて体をなでて川に流す信仰あり。
- \* 欽明天皇553年：陰陽五行説伝わる・天子南面（向かって右）・大正時代まで続く。
- \* 古代：宮中：供物・節宴・鬪鶏とりあわせ・曲水の宴・穢れを祓う式。
- \* 古事記・日本書紀・・・イザナギ桃の実を投げて逃れる・桃の花を浮かせた酒を飲み万病をさける・桃には魔よけの力があると信じられていた・桃花酒とうかしゅ・江戸時代白酒になる。飛鳥時代5月5日薬草狩り→端午の節句につながる。
- \* 奈良時代：禊・「ひとがた」→「おまもり」としての人形をうむ。また玩具としての人形が生まれる。立雛として発展。
- \* 平安時代・公家社会・人形遊び・ひな・ひいな遊び：源氏物語・若紫・紅葉の賀・ままごと遊び・天児（勝）あまがつ：お守り人形、犬筥（犬箱・犬張子）を結婚にもたせる。這子庶民に広がる：子供の玩具。
- \* 天徳四年（960）：紫宸殿火災で梅橘焼失・重明王の桜を移植・以降桜橘となる。向かって右白梅・左紅梅の例もある。
- \* 栄華物語（1030）：雛の形状記述あり・扁平な紙の様な人形・紙雛・神雛。男雛：小袖に袴、女雛：小袖に帯。頭は紙や藁を丸め胡粉ごふんで塗り固めたようなもの。
- \* 平安時代中国より蓬餅・草餅伝わる。蓬餅昭和30年頃桜餅になる。
- \* 平安時代・節会せちえ・菖蒲を・・・無病息災を祈る。

- \*平安時代末期・・大阪四天王寺・七種の懸守：これに木目込みの 3 p 技法あり。
- \*鎌倉時代宮中で赤飯を食べだす・・小豆が身体に良い・赤に厄払いの意味がある。これが江戸時代民間に拡がり、お祝い事の食事としての赤飯になる。(弥生時代の赤米が赤飯になった云う有力説あり)
- \*鎌倉時代：八朔はっさく：8月1日を祝う・タノミ・タノモの節句。八朔人形。
- \*鎌倉時代・・菖蒲湯・菖蒲酒・菖蒲枕あり。
- \*永享四年（1432）「看聞日記」・「こぎのこ（羽子板）」勝負を行う・・羽根つきは子供が蚊に食われないおまじない。この羽子板の飾りが装飾化する。
- \*立雛（たてひな・たてひいな）室町時代に生まれる：これがお雛様が変わる。
- \*中世子供の母親の両親が初節句に人形を贈る。
- \*室町時代：張子細工として犬張子・起き上がり小法師が製作される→だるま。
- \*室町文明11年（1497）：「御湯殿上日記」：「この宮の御かたの、ひいな やいてきて、御やわたりとて、御さか月いる」：ひいなや雛屋。母子草蓬餅にとつてかわられる。菱形の餅室町時代にあり。
- \*室町時代：胡粉製造技術 中国より伝わる。
- \*室町時代：雛祭りが始まったという説あり（雛祭りの始まりについては諸説あり）。
- \*室町弘治二年（1556）：「言継卿記ときつぐきょうき」・「中御門娘御兩人へヒヒナ、ハリコ以下十五包」贈った。天正頃衣装の金襴技法明より伝わる。
- \*京の深草・伏見人形→全国に郷土玩具としてひろがる。
- \*慶長（1607年）頃、黒田藩・正木宋七築城の際の瓦作製材料で人形を作製・献上・これが博多人形の始まりとされる。博多の産業文化地理的位置等が博多人形発展に大きな役割を果たす。→1700年代津屋崎人形になる。
- \*江戸時代初期：角倉了以・京都で嵯峨人形製作始める。木彫り・盛り上げ彩色・金箔等で仕上げる。江戸では「置き上人形」といわれた。
- \*江戸時代前期：立派な立雛作られる・・立ち姿の人形として現在に残る。座り雛も製作され出す。赤飯お祝いの食事として民間に拡がる。
- \*元和六年二代将軍秀忠の娘和子（1607～78）入内・女帝となりサロン文化開花。
- \*寛永二年（1625）3月4日「御湯殿上日記」「中宮の御方より、ひなのもの、御たてまつる」・・・等の記録あり。有平糖宮中に収められる。他に饅頭・羊羹・カステラ・かるめら・金平糖等。雛祭りの始まり。
- \*寛永（1623～1639）頃：寛永雛・・最古の座り雛。男雛の髪と冠は一体で黒く塗りつぶされる。東照宮創建始まる→岩槻いわつきに創建にかか

わる各種技術が伝わりだす。上流社会では3月節句に雛祭り行われだ 4 p  
す。この頃五月節句の記録が見られる「絵本十寸鏡」。

\*寛永六年（1629）京都御所で盛大な雛祭り開催→大奥・武家・  
商家に雛祭りが拡がりだす。

\*寛永：春日檜物職の岡野平右衛門・・奈良人形（奈良の一刀彫）を生む。文  
化時代に流行する。

\*寛永（1624頃）茶人金森宋和・茶摘み人形を製作し始める。

\*寛永六年（1629）御所で盛大な雛祭り行われる→幕府の雛祭りにつな  
がる。この頃座雛作られだす。

\*寛永風雛かんえいふうひな（1624～1644）頃。

\*寛永九年（1632）春日野局上洛・・雛の道具の記録あり。但しこれは実  
際に宴で使用するもので、祭りに飾る品々は小さかった。

\*寛永十五年（1638）「毛吹草けふきくさ」3月3日曲水の宴・桃の酒・蓬  
餅・鶏合にわとりあわせ・住吉の潮干狩り。

\*慶安二年（1649）家光：「慶安のお触書」雛道具の蒔絵や金銀の箔押しの  
禁止令。その後しばしば禁令・取り締まりが行われる。

\*明暦年間（1655～）「俳諧埋木」・・「御づしには、ひなや・はりこの並び  
みて」。

\*寛文元年（1661～）：紙雛の図記録あり。

\*延宝6年（1678）：元禄文化・町人の台頭。

\*延宝（1681年頃）：「八十翁疇昔話やそおうなむかしばなし」・大人の雛遊  
びとして雛飾り・食事を備え・諸道具をかざり・草餅を・・・。

\*貞享（1684～88）：江戸中橋、尾張町、十軒店たな、麴町、人形町で2  
月27日～3月2日まで、雛市がたつ。この頃は蓬餅と白酒。蓬餅は菱形に  
切られる。

\*貞享元年（1684）：日常的に雛遊びあり。「擁州府誌」紙雛・紙人形・酒  
もそえる。「江戸鹿子」に「甲人形売り」・「江戸中、甲人形、のぼり立」・・・。

\*貞享年間（1684～）：「江戸鹿子」・・4月27日～5月4日中橋・十軒棚  
（十軒店）・尾張町壺丁目・浅草茅町・人形町・芝神明・・甲人形・五月節句  
もの販売。甲や旗を道筋に立てる。

\*貞享元年（1684）芥子人形「雍州府志」ようしゅうふし「史244p」。  
但し幕末近くに生産された芥子人形もある。

\*貞享三年（1686）：好色五人女に「裸人形」あり。

\*元禄（1688～1703）：元禄雛・大名や上級武家・商家で女性の行事と  
して雛祭がおこなわれる。普通の家では紙雛が飾られる。絵師石川流宣とも  
のぶ「大和耕作絵抄」や浮世絵絵師菱川師宣の作品に雛祭の記録あり。3月

3日で子供の雛祭りではなく大人の雛祭。緻密な細工、調度もつ 5 p  
くられる。

\*元禄～享保（1688～1735）：「塩尻」天野信景・・・雛飾りに無関係な人形が町家では飾られる。武家ではあまり無関係な人形を飾ることをしなかった。

\*貞享五年（1688）発行：「日本歳時記」・端午の節句・・・飾りは家の前・道端に飾る。見える見せるのを原則とする。この頃浮世人形作られだす。

\*元禄十年（1697）：仏師恵信岩槻逗留中おが屑に生麩糊なまふのりを混ぜて練り固め彩色→塑像作製→人形の頭となる。

\*元禄（～1703）のころまで紙雛・内裏雛だけ。夫婦雛みようとひなともよばれる。この頃「雛の使い」「雛の駕籠」・・・雛を贈る習わしあり。女子の祭りを雛祭りとして限定していない。端午の祭りも男子と限定していない。共に男女関係なしのお祭りとしている：岐阜県洲原町・岐阜県下河内。

\*享保（1716～1730）～寛政（1789～1800）：雛人形格段の進化を遂げる。立雛・座雛・精巧に細工した大き目の座雛も普及。寛永雛の改良のすすんだもの。町屋ではやる。高さ45cmくらいが多い。女雛天冠を付けているものもある。

享保雛：大型化・能面の様な美しい顔立ち・衣装は豪華な錦や刺繍・男雛は太刀を持ち冠をかぶっている。丸顔・引目・鉤鼻が特徴。手足の細工も微細になる。女雛が天冠を付け出す・五衣いつぎぬ・唐衣からぎぬ・袴に桧扇。

髪は植毛が始まる。段飾りが無い関係で一つずつが比較的大きい。雛市25日と早まる。浅草茅町（浅草橋）・池之端仲町・牛込神楽坂・麴町・芝神明町等が雛市として加わる。京都・大坂・名古屋等でも雛市が開催される。2月末から3月2日まで開催。公家の間では3日～5日を雛祭りとする。江戸時代の雛人形は大型。

\*享保元年（1716）：享保の改革。

\*享保六年（1721）：八代将軍吉宗：享保の改革・奢侈禁止・人形高さ24cm以下ときめる・梨地・蒔絵禁止・幕府献上品も漆塗りまでに限定。

\*能の演目・・・石橋しゃつきょう・猩猩しょうじょうの人形生まれる。

\*江戸時代紀州家「雛祭の作法・・・朝は膳・昼は蕎麦そば」。岩槻は素麺。

\*五人囃子：江戸中期 江戸で生まれる。このごろ雛遊び・雛飾り・雛ごととも言っていた。雛段まだ生まれず。内裏雛が雛飾の正面におさまり紙雛添えものようになる。なお江戸時代の雛は現在の雛と異なり大きな雛であった。

\*享保十七年（1732）享保の大飢饉 若宮餓死1193人。

\*享保十八年（1733）：「西川祐信」「絵本美那川」五月節句・外飾り・門に菖蒲をふき、毛槍・薙刀・台傘をたて・かぶと人形をかざり・・・。

- \* 元文・寛保（1736以降～）若衆形佐野川市松活躍：これに似せた 6 p  
市松人形：子供の裸をかたどった人形（裸人形・抱人形）に着物を着せたものの総称。この頃登場。その後これに似せた人形「江戸後期登場：市松人形」といわれるが、但し京阪の呼び方。江戸では単に人形と呼ぶ。三八・おぼこ・ぼんち等ともいわれた。20cm～60cm。三つ折れ人形としてそれぞれの家庭で衣装を作成飾られていた。（史248p）。
- \* 元文（1736～）：京都賀茂神社の雑掌・高橋忠重、木目込み人形（賀茂人形・加茂川人形・柳人形）を作成する・・・木目込み人形の始まり。
- \* 地方では子供の雛見学・雛あらしがあった。江戸ではなかった。
- \* 延享元年（1744）：「絵本寝覚種ねざめぐさ」・・・五月端午の節句で一部座敷飾りが始まる。
- \* 延享二年（1745）：百姓一揆・打ち壊しの激増。
- \* 延享五年（1748）：「絵本十寸鏡」西川祐信・雛祭りに嬰兒の記録あり・・・子供誕生と雛祭りのつながりの最初の記録。
- \* 宝暦元年「1751」頃までに二段三段の雛段がつくられる。
- \* 宝暦十一年（1761）日本橋に京都の人形師雛屋岡田次郎左衛門・引目、鉤鼻・・・丸い顔・小さな作りで次郎左衛門雛・大好評・・・現在まで続く。蛤の貝殻を椀に見立てて料理を供えている記録あり。
- \* 京都で有職雛ゆうそくひな：次郎左衛門雛に対抗して作成されだす：1束帯・2布袴ほうこ・3衣冠・4直衣のうし・5小直衣・6狩衣かりぎぬ。女雛・正装の十二単・平服の緋の袴に小桂こうちぎ着用。着せ替え可能。宮中に仕えて公家の装束を製作する高倉家・山科家が衣装の作製にあたる。
- \* 明和年間（1764～72）八楽人・右大臣左大臣の雛京都で生まれ、江戸に伝わる・・・樟脳に包んで蕎麦を食い。
- \* 明和年間（1764～）：「女芸文三才図」・・・娘・夫人の間で、江戸では姉様・姉様ごっこ、京ではお母様・お母様ごっこ・・・として人形を着飾らせる遊びが流行する。同じく「雛草」での人形製作遊びあり。
- \* 明和九年（1772）：公家の間で、初節句で雛を贈る・「江家日記ごうけにつき」。江戸中期裸嗟峨から御所人形が生まれる（後半にも同じ記述）。
- \* 安永元年（1772）田沼意次老中。
- \* 安永（1772一）：このごろ五段の雛段が江戸で誕生。京都ではこのような派手なことはさけた。埼玉県鴻巣岩槻越谷等で雛人形・五月人形・羽子板生産盛んになる：「武蔵鏡」。
- \* 安永年間（1772～）川柳・五月雨が晴れると鯉のたけのぼり。
- \* 江戸時代までは内裏雛の内、女性が向かって左。右が男性。左優先の考え。陰陽・中国の考え。（左大臣の方が位が上位と同じ考え）。

- \*江戸時代雛菓子：落雁らくがん。餅は紅白が中心、地方によっては 7 p 黄色や五段重ねがあった。公家の雛祭りは三歳～十三才で行われる。
- \*江戸時代：相模敦木（厚木）雛を相模川に流す。羽後河辺郡子供の生まれた家で「天勝（児）あまがつ」川へ流す。
- \*寛保・延享（1741～1748）：「寛保延享江府風俗志」今の様な立派な雛少なし。次郎左衛門雛・本装束雛少なし。傾城の立ち人形・汐汲み・猩猩しょうじょう人形等を並べる。その後下り（京よりきた）赤塗りの練物（おかくずを型にはめて作りそれを彩色する）・馬・弁慶等を飾りだす。備える料理は蛤貝等にそえる。雛段の敷物は更紗染めの木綿又は風呂敷等ですます。
- \*寛保二年（1742）：西川祐信「絵本和泉川」・いもせを祈る女の遊び・夫婦和順を学ぶため。この頃「おやま人形」等もあり。焼物・練り物ねりものの人形が農村一般では普通であった。
- \*年代不明：江戸時代と推測：這子から進化した代表的人形：白肉人形・白菊人形・水引手・頭大人形・大内人形・お上り人形・御局人形・拝領人形・お土産人形・お雛人形・伊豆蔵人形・明治40年以降「御所人形」と名付ける。
- \*宝暦十年（1760）：雛人形等の頭部京より江戸に下って来て困ると、江戸の人形問屋が京に抗議する。
- \*明和年間（1764～72）：日本橋十軒屋店「原舟月はらしゅうげつ」古今雛こきんびな製作：写実的：髪のははは植毛・綸子使用その上に金糸銀糸で刺繍・後年水晶やガラスの目開発・全国的にひろがる。明治大正昭和現在へとつながる雛が誕生。
- \*明和年間（1764～）：「混交苦口記まぜこぜくちき」・大きいのをいいことに・・・近年は籠も銅製・鍋や釜も金属製で・・・すべて奢りから出たことで・・・雛の道具が上製になりだす。
- \*明和二年（1765）：酒田で京都より傘福（つるし飾りと同じ）の原型をお祭りに取り入れる。
- \*明和年間（1764～72）左大臣・右大臣を飾ることが京都で生まれ、江戸に伝わり江戸の雛飾りに登場しだす。
- \*三歌人（三賢人）雛：菅原道真・小野小町・柿本人麻呂のようになってほしいとの願いで雛段に飾られる。・・・明治中ごろ注文が少なくなる。
- \*安永～文政（1772～1830）：川柳・「何事のように姉妹、雛を分け」・・・雛祭りが子供の誕生につながる記録。
- \*天明元年（1781～）：江戸で五人囃子生まれる。「宝暦現来集」。武具持たず。平和の表れか・子供の可愛さ。京では八楽人または五楽人。
- \*天明2年（1782～1787）：天明の大飢饉。

- \*天明3年(1783):真澄遊覧記 七夕に紙人形軒先につるす。 8 p
- \*天明・寛政の頃(1789~):内裏雛を描いた軸物あり:「画家寺沢昌次」。
- \*天明6年(1786):寛政の改革。
- \*寛政の頃(1790頃):金時人形を端午の節句だけでなく、雛祭りでも飾る。六歌仙人形も飾られる。「戯子名所図会」。
- \*江戸後期:市之助人形の記録あり。(市松人形ではない)(史252p)。
- \*寛政4年(1794):化政文化。
- \*寛政七年(1795):「絵本たとえ草」・裸人形・服装をつくり普通の遊びで使用。又雛飾りとしても使われる。
- \*雛飾りに大きな差がみられる。雛飾りに階級差がある。・・飢饉の多発の中で雛まつり。将軍・大名・公家・上流の商家・・・と下級武士・貧農・・・。
- \*文化年間(1804~18):桃花酒が白酒になる。神田鎌倉河岸の豊島屋の初代が新しい方法で白酒を造る。(江戸時代初期山城国の名物の山川白酒あり)。江戸の雛飾り年中行事に一家をあげて賑やかに行う・・現在につながる雛祭りに近づく。豊作を祈る作雛あり。
- \*文政年間(1804~1830)「おきあげ・押しえ雛」人形製作技術進む。  
押し絵羽子板が流行。
- \*文化二年(1805):江戸南町奉行雛店を手入れする。儉約令違反。
- \*文化八年(1811):「進物便覧」・雛祭りで揃える料理が多様化する・・諸子・飯蛸・常節・くわい・よめな・干がます・・・。江戸の雛市に中古品を扱う店も生まれる。大阪・京では中古品は扱わない。
- \*江戸時代後期:古今雛流行する。
- \*文化十年(1813):「人形は大なるをこのみ、道具はすべて小さきをよしとする」。
- \*文政時代(1818~1829):岩槻人形師橋本重兵衛 金襴の袷・木彫りの手・おが屑に胡粉を混ぜた頭部を作製:大ヒットとなる。初め男女一對の両性具有のような顔立ちで「岩槻の袷人形」を完成させる。→これを真似て浅草今戸の土雛→下総雛となる。
- \*天保(1830~):大蔵常長「広益国産考」・尾張・三河・遠江・・節句・土人形ばかり飾る。貧しさの現状。市松人形:川柳に登場。
- \*天保七年(1836):天保の大飢饉。
- \*天保11年(1840):天保の改革。
- \*江戸時代後期文久年間(1861~1863):緋毛氈あり。似顔絵人形・武家や商家大名公家等がつくる。90cm位の大型の人形もあり。
- \*徳川家定1855頃:将軍家の飾り「江戸雑和」より・表座敷の対面所・二の間・内緒の雛飾り即ち常にいる座敷(これは公開しません)の三か所に飾る。

対面諸に2月25日より3月6～7頃まで飾る。対面所の雛は三日 9 pのみ拝見がゆるされる。後ろに紅白の縮緬、その前に金屏風をたてる。金屏風には吉野山・竜田川・曲水・源氏等を描く。三段雛で高さ2m長さ15m程度。上段は内裏雛を何組も並べ、その中心は小直衣雛さらに次郎左衛門雛や高倉雛で雛の高さは30cm～45cm。二段目は楽人・笙しょう・箏篳ひちりき・火炎太鼓等・三段目様々な能人形。他に蜀台・生け花・花桶等を配置する。膳は一日～四日・朝と昼の二度供える。御台所と同じもので初めから小さいもので準備。雛祭り終了後雛は大名等にさげ渡される。大名は將軍に見習い三ヶ所飾る。將軍等専属のおかかえ人形師が雛等の作成にあっていた。「南紀徳川史」等。

- \*江戸時代後期：紫宸殿をまねた御殿（御厨子）に桜橘植えられる：江戸の御殿は東照宮をまねる。喜多川守貞「守貞曼稿」記載 京都大阪二段飾り主流（簡素で古風）・江戸五段～七段飾り主流（派手で様々な雛道具が揃えられる）。
- \*江戸時代後期推測では御所人形（お土産人形・名古屋ではお雛人形とよばれる・白肉人形・伊豆蔵人形・能人形とも呼ばれる）（明治以降大人形・大内人形・御上人形・御局人形・拝領人形等でよばれる）が創始されたと思われる。
- \*江戸時代後期：「雛人形」の言葉うまれる。「ひいな」は言いにくく、「ひな」に人形を加え「雛人形」となる。
- \*江戸末期：京・御殿・内裏雛・隨身・桜と橘・御所車・屋根は紫宸殿・源氏枅わくで、一つの考えで統一されている。江戸：京に五人囃子さらに様々な人形等が飾られることがおおかった。江戸は多い事を自慢する傾向にある。
- \*江戸後期：土人形流行。
- \*江戸後期：五月飾り・・・江戸中心で、武家好みで作成される。京の流れは入っていない。
- \*江戸後期：岩槻：江戸時代人形つくり農家の副業・下級武士の内職→明治へと続く。江戸から移り住んだ大蔵大膳・留次郎親子着付け技術を発展させる。岩槻の人形師京都等で人形師として修行→岩槻に技術をもち帰る。又人形問屋が出来だす→雛人形産業としての確立。2月21日～26日雛市が始まる。
- \*江戸後期～明治：八女地方で箱雛製造されだす。
- \*幕末芥子人形現れる（史245p）
- \*明治天皇雛（御大典雛）・・・天皇神格化により作られなくなる。
- \*明治：内裏雛・官女・五人囃子・隋人・衛士などの現在風の飾りになる。他の人形等は飾らないようになる。但し地方色が出た雛飾りも残る。例えば博多では博多人形が雛人形として使用される。久留米周辺では押絵細工の雛を飾る。

- \* 明治・西洋人形が入ってくる。伏見土雛を大量に中国地方方面に販 10p 売・・貧しさの現状。
- \* 明治に入り：東京・京都・大阪等の雛が全国に向けて売り出される。・・全国共通の雛が出回る。それも古今雛が中心になりだす。勿論地域それぞれの特色をもった雛や人形も存在するが。但し、旧習打破で三月・五月の節句飾り一部で衰える。
- \* 明治六年：人日・上巳・端午・七夕・重陽・廃止。神武天皇即位日・天長節を休日とする。太陽暦採用のため。復活するのは明治二十年頃より。
- \* 明治時代以降餅は現在の緑・白・桃色の餅になる。緑は新緑・白は雪・桃色は桃の花。花見正月の行事3月にあり。
- \* 雛の生産量関東が一番多い。質的には京の雛が優れているといわれる。
- \* 東京の裕福な家庭の雛飾り：五段～七段の雛飾り・赤いきれや毛氈を使用・最上段に屏風を背景に内裏雛を一对配置・次に三人官女・両端に桜と橘・但し桜・橘や随身の位置は任意。下の方二段に衛土えじ・市松人形・汐汲みなどの浮世物・調度・供物・蜀台。雛段の前に桃の花や柳を生ける。段数は五か七を目出度いとする。
- \* 明治四十三年：三越が販売した雛飾りの浮世物：種蒔三番・石橋・羽衣・蝶の舞（二人立）・末広（二人）・鶴亀（二人）・高砂（二人）・太田道灌・汐汲み・小野小町・楽人・狛引ちんひき・・・大正頃までこのほか、えびす・浦島・舌切雀・花咲翁・弁天・猩猩々・手古舞等。
- \* 明治末：雛段に羽子板・破魔弓・鞠まり等の正月物も飾られる。
- \* 大正天皇即位式1912：ヨーロッパに見習い、天皇向かって左に位置する...
- \* 大正時代頃より雛飾りセットが販売されだす。それまでは少しずつ雛や雛用具を買いそろえていった。
- \* 大正十二年1923年関東大震災→東京の人形関係者困難を極める→この間岩槻いわつきに雛産業全国に広がる。
- \* 端午の節句の飾り三段等小型化する→現在につながる端午の飾りの始まり。  
飾り方：兜を含む鎧よろい中心に人形・武具・飾馬等を左右又は下段に並べ、三方に菖蒲酒・粽・柏餅などを供える方法が一つ。もう一つは人形中心に鎧よろい・武具・飾馬・供物を飾る。双方共にうしろに旗・幟・槍・纏などをたてた五本乃至九本立ての框をおき、その左右に鯉幟と吹流を立てる。さらに後ろに陣幕又は矢屏風をたてまわすこともある。
- \* 東京のデパートで、組んだ雛飾りが販売されだす。
- \* 大正三年：みつこしタイム：雛販売を概略1：従来の親王・官女・隨身・五人囃子・仕丁。2：変わり雛。3：玩具的雛とする。（細部略）
- \* 大正初め：清水の陶製人形：博多人形形式となる。

\*筑豊地区の炭鉱で雛軸流行する。紙に印刷されたお雛様。 11p

始まりだした年代不明。

\*大正頃まで一つずつが大きな雛で、江戸時代の流れで存在したが、段々小さくなって現在に至る。

\*雛人形を買えない家では清姫・静御前・鞠を持つ女等を飾る。また買えない家庭では掛け軸の雛・押絵雛等もあり。

\*人形のスタイル・オリジナルな作品でです。→昭和人形。

\*昭和の初め頃現在の柳川のさげもんの原型が決まる。この頃手芸大流行する。

\*市松人形の答礼 昭和3年前後1928頃。

\*昭和16年1941太平洋戦争→東京の人形師一部岩槻に転住。昭和20年1945年岩槻で人形組合結成→人形の町として発展。

\*戦後小型で童顔・木目込み細工のケース入った揃い物が流行となる。

\*昭和30年ごろ、一般家庭に七段飾りが広まる。藤娘・汐汲・道成寺人形はやる：雛祭菓子として東京では金花糖：絵柄は鯛・蛤・サザエ・海老等。桜餅この頃供される。以前は蓬餅と白酒。

\*昭和40年代以降：飴細工の有平糖で作られた雛菓子が流行・小さな花籠や果物籠。

\*昭和年代後半、七段飾りより置き場所等の問題等で、ガラスケース入りの雛飾りや人数を少なくした雛飾りがひろまる。様々の雛飾りスタイルあり。

\*昭和59年（1984）日田旧家・草野家で雛人形一般公開始める・・・九州雛祭りの初め。

\*平成3年（1991）宮若市脇田温泉加納文化館・雛飾展をはじめ。

\*平成9年（1997）八女ぼんぼんまつり」（八女ひなまつり）始める。

\*平成9年（1997）伊豆稲取雛のつるし飾り祭り始まる。

\*平成12年（2000）飯塚市ひいな祭り・佐賀の雛祭りはじまる。

\*平成19年、柳川まり保存会結成。

\*平成20年（2008）第一回つるし飾りサミット伊豆で行われる。柳川のさげもん・伊豆稲取雛のつるし飾り・酒田の傘福をもって三大つるし飾りと言う。

#### 参考2：順不同 詳細略

(1) 現在も生産されている土人形：弘前・花巻・堤（仙台市）・米沢・八橋やばた（秋田市）・米沢・名古屋・越おこし（愛知県）・犬山・亀崎・（愛知県）・瀬戸・富山・金沢・伏見・大阪・稲畑（兵庫）・長浜（島根県）・津山・十日市（広島県）・博多・津屋崎人形・古賀（長崎県）・天草・帖佐（鹿児島県）・那覇・等：郷土玩具。

- (2) 現在遺品の多い雛は・・・寛永雛・享保雛・次郎左衛門雛・有12p職雛（別名親王雛・高倉雛：高倉家・山梨家が製作・公家専用）・古今雛。  
 \*次郎左衛門雛・古今雛は江戸時代の名称。他は明治以降好事家が付した名称。土雛は地方で多く生産された。
- (3) 雛の国九州：飯塚市・佐賀市・平戸市・柳川市・うきは市・八女市・日田市・中津市・杵築市・人吉市・綾町・鹿児島市（仙巖園）。
- (4) 雛ひいなひいなの宴うたげ：瀬下麻美子せしたまみこ氏のしたまみこ氏は本書で「変わりゆく雛の歴史」で概略雛の生誕順を下記のように記しています。勿論一般向けの主として写真集なので、詳細は略されています。概略雛飾りの歴史。インターネットでの雛の歴史は後半記載。
- 1：天児あまかつ・這子ほうこ→2：立雛たちひな（紙雛・神雛）→3：寛永風雛かんえいふうひな（1624～1644年）→4：享保雛きょうほひな（1716～1736年頃）→5：有職雛ゆうそくひな→6：次郎左衛門雛じろうざえもんひな→7：古今雛こきんひな：8：御雛屏風おひなびょうぶ・明治天皇雛・皇女和宮こうじょかずのみや・三歌人さんかじん（三賢人）初参稚児ういざんちご・稚児輪ちごわ・御所人形。

**参考3：順不同 詳細略**（様々な表現・表記あり）

- \*1 節句：元、節供せちく。「ふしめの供養」で、季節の変わり目にお祝いをし、神様にお供えをする習慣。1：元旦 2：正月十五日の七草粥・後七日（人日じんじつ） 3：3月3日の草餅 4：5月5日の粽ちまき 5：七月七日（七夕） 6：9月9日の重陽ちょうよう。民間では節分・彼岸・八十八夜等も含む・節句は農村の休日。五節句は明治維新で排されたが、戦後3月3日（節句）と5月5日（子供の日）が復活。「雛祭り3月3日を桃の花・桃の節句・弥生の節句」とも呼ぶ。
- \*2：3月の節句：江戸時代でもかなり後、現在の子供誕生につながる雛かざりとなった。それまでは一般女性の雛祭り・また端午の節句関係も関係していた。但し娘の祭りとされる場所もあった。女子誕生を雛祭りとするのは江戸時代中ごろと推察される。
- \*3：岐阜県太田町・・・女がいなくても雛祭りを行っていた。長野県四か庄・・・男の誕生でも雛何一對を贈る習あり。静岡県東部にも節句で男子のお祝いをしていた。
- \*4：節句：近世「桃花の節・桃の節句・弥生の節句」等によぶ。初めの頃は「上の巳かみのみ」文武天皇の頃の記録。3月3日と定まった。
- \*5：地方の変わり雛。 5-1糸雛。5-2菜の花雛。5-3薩摩の巻き雛。
- \*6：柳川のさげもん 6-1江戸時代城内の奥女中が着物の残り布で琴爪入

れをつくり、それからさげものがうまれました。6-2・7×7 13p  
 =49にさらに中央に2を加え51で飾る。49を一年でも長生きを願い50にする。50は割り切れるので51とする。下げる順序は上中段に飛ぶもの・木になる(咲く)もの、中下段に水中のもの・動物・人形を基本とする。最下段は這い人形・柳川まりとする。6-2蟬せみ：土の中にながくいて、辛抱の象徴・また元気な産声。鼠：子沢山。蝶：蛹から蝶へ・きれいに着飾らせて嫁に出したい親心。兎：おとなしく、でも元気に冬山を遊びまわる。猿：子供を大事にする。元気に遊びまわる。鳩：幸せと平和のシンボル。ひよこ：かわいらしさ・あどけなさ。鶏：朝早起き、つがいで仲良く卵を温め育てる。鶴亀：長生き。唐辛子：小さくてもピリツとしている。梅(花)：寒さに耐え、春に先駆けて咲く。桜：みんなを楽しませる。桃：完成。みかん：場内の宮若家のみかん。桔梗ききょう：物静かで上品な花。おくるみ人形：生まれたばかりでかわいい赤ちゃん。這い人形：生まれてはいはいするようになった親の喜び。振袖人形：「はえば立つ。立てば歩け」の親心。三番叟：祝いの席の舞。おかめ：女は愛嬌美人になるように。瓢箪：無病息災。宝袋：心の豊かさ。蛤：二夫にまみえず。金魚：ゆるやかに泳いで、人の目を楽しませる。海老：年老いて、腰が曲がってもなお元気。レンコン：見通せる。まりは木目込みまりや七宝織りがあるが、「柳川まり」が一番いい云う人もいう。人様々。  
 \*7：玩具の人形。7-1熊本のべんた。7-2糸操り・管人形。7-3釣り合い人形。

\*8：こけし。略。

\*9：羽子板明治時代隆盛となるも、始まりは江戸時代と思われるが、いつごろかは不明。起こりは公家と推察される。羽子板市場も東京等で盛大に行われる。正月のみでなく雛の節句にも飾られた例がある。

\*10標準的な七段飾りの内容(人形小辞典等を参照)：他にも様々な飾り方あり。方向は何もいわなければ内裏様より南方向で示し、逆の場合向かって～と表現する。(人形小辞典65p)

10-1-1：一番上の後ろ・金屏風。様々あり。

10-1-2：一番上の左・お殿様。右・御姫様。(京風)江戸は逆。

10-2：三人官女かんによ・上より二段目。向かって左・長柄銚子官女・成人した女性。真ん中・三宝持官女・一番若い・盃をのせた三方又は島台。向かって右・提さげ銚子官女・既婚女性・眉まゆをそり、鉄漿おはぐろ、長柄ながえの酒入れを持つ(真中の説もあり・服装もまちまち)。

10-3：五人囃子・上より三段目・江戸中期江戸で生まれる。向かって左より平太鼓。二番目・大皮鼓。真ん中・小鼓。四番目・笛。向かって一番左・謡。江戸時代生まれる。平和希望未来の象徴と推測。京の大人の場合五人雅

楽等。

14 p

10-4：上より四段目・隨身：警護役。向かって左が右大臣で若人。向かって右が左大臣で、老人・黒っぽい装束。左大臣が上位で、年配者尊重の考え。大化の改新の律令制で生まれた公家社会の律令制の官名。左より二番目の台・御（料本）膳。御膳揃え・真ん中二つ・菱台で菱餅・かつては、心は菱形ひしがたと考えていた。三菱の考え。元三段で五段もあり。雪がとけ・青葉が目を出し・桃の花が咲く季節感をもたせる。（武・27 p。祭り16 p）

10-5：五段目。左端・橘。右端・桜＝もと橘・960年の項参照。左より二番目・仕丁しちょう・衛士えじ下働きの従者で大変怒った顔・怒り上戸。真ん中・同じ仕丁で泣き顔の男性・泣き上戸。右仕丁で優しい顔の翁・笑い上戸。この仕丁は人生の様々な様子を表現している。人生最後は右の年配者の様になりたいものです。製作者の技量差を表す表情である。近づいてゆっくり見てください。この右大臣・左大臣や仕丁が武具を持つのは戦いに備えてで、江戸時代生まれた五人囃子の平和の象徴と比べると現実の厳しさを考えさせられます。いつの世にも争いが絶えない平和が来ない現実。この現実に対して雛飾りで一時の平和を味わいたいという考えが雛飾りを生んだのではないのでしょうか。

10-6：六段目・七段目・・・詳細略。箆筒たんす・挟み箱はさみばこ・長持・鏡台・針箱・火鉢・衣装袋・茶の湯道具・御駕籠おがご・重箱・御所車・・・すべて嫁入り道具で公家や大名が娘の嫁入りに持たせた用具等。江戸時代のすぐれた工芸技術の素晴らしさを示す。漆づくりや蒔絵等在り。

- \* 11：江戸時代の楽・・・武家は式楽・能楽。商人は仕舞・搖・狂言の小舞。一般は浄瑠璃・長唄・小唄・常盤津（三味線音楽）。
- \* 12：江戸時代能の演目として石橋しゃつきょう・猩猩しょうじょうが飾られる人形として登場。その後歌舞伎の中から昭和30年代藤娘・汐汲しおくみ・道成寺・小野小町等が製作される。
- \* 13：緋毛氈・・・同じ赤でも、アカネ草の赤・紅花べにばの紅等・があり、朱は厄除けの色である。雛段の下敷きの毛氈の赤は雛飾り全体の魔よけを示すものです。
- \* 14：雛飾りは立春（2月4日）頃に飾る。雪国では月遅れの4月3日を節句とするところもある。
- \* 15：紙雛が立雛の原型であり、「神雛」ともいわれ、その後の立雛及び人形になり、一方で座雛として現在の雛飾りになった。
- \* 16：抱き人形（別名・三つ折れ人形）腰・膝・足首が折り曲げられ、座れるようになっている。これら様々な人形も雛段に並ぶこともあった。
- \* 17：端午の節句について：五月端はじめの午の日→その後五月五日となる。

陽数の五が二つ重なることを瑞相と解したため、三月三日の 15 p 重三ちょうさんと対偶させ重五ちょうごとと呼ばれる別称もありました。以下の内容で「奈良・平安朝を通じ宮廷の重要な行事とされていた端午の節句も、平安時代末頃には衰え、やがて廃絶していましたが、再び鎌倉時代になり、菖蒲枕や菖蒲湯が生まれ、広く流行し、武家の間でも菖蒲刀、菖蒲兜を贈るようになりました。菖蒲が尚武に通じたためです。

\* 18 : 胡粉 : 原料はイタボガキというカキ・石灰質部分が多いので、胡粉として最適とされている。炭酸カルシウム。18以下25までインターネット。

「雛祭り」木ノ下千栄より引用。一部澤田追加変更。

\* 19 : 雛人形の眉毛 : 眉毛がなく、円形の点が二つ描かれている。これを殿上眉・高眉・引眉という化粧法。奈良時代から平安時代にかけて行われた化粧法を現在雛人形に取り入れている。

\* 20 : 雛人形は七段15人が基本。中国の「魔法人」は15が基本・この中央横列7・5・3による。これより七段飾・五人囃子・三人官女になる。七五三や十五夜もこれによる。

\* 21 : 雛人形を飾る期間・立春（二月四日）頃～三月中旬頃まで。片づけは天気の良い乾燥した日。乾燥した日を選ぶのは雛人形の傷みを避けるため。但し3月2日を「宵の節句」、3月4日を「送り節句」として飾り、5日片づけるのを基本とするが、現在はこれにこだわらない。又いつまでも飾っておくのは「娘の婚期が遅れるので良くない」といわれるがこれは「家の中が片付かない・雛が痛む」からです。昭和初期に作られた迷信。旧暦の場合梅雨が間近の為、雛等がカビ等で痛むからです。

\* 22 : 雛祭りの食事・お寿司と蛤はまぐりのお吸い物・蛤は女性の貞節教育のため（男性も同じ・・・）。お寿司は季節的に魚介類が春になり豊富になるため・但し現在はお寿司にこだわらない。母親手作りの心のこもった料理であればいい。

\* 23 : お雛様に桃の花を飾るのは、桃の木に邪気払いの薬効があるため。柳の木を飾るのは柳の木の生命力が強く、健康を祈ってかざる。

\* 24 : 雛祭りの発生 : 中国漢の時代「徐肇じょちょうの 女兒三人が共に3日以内になくなり、その嘆き悲しむ姿を見た村人が酒を持ち、三人の亡骸を清め水葬した。この水葬の行いが平安時代日本で「上巳の祓い」として、3月3日に陰陽師にお祓いをさせ、自分や子供に降りかかる災難を生年月日を書いた紙の 人形ひとがた に移らせて川に流した。この様子は現在も下賀茂神社の「流し雛」の行事で見られます。この紙雛が現在のお雛様に発展したといわれています。（水葬のおり、紙人形等を使用したかどうかは記載されていない

い)

16 p

- \* 25 : 雛菓子 : 現在は種類は自由であるが、原則は「ひちりき。形は阿古屋貝。作る時「ひっちぎって」作ることから。この菱餅は5色では茶色→黄色→緑→白→赤の順。これは土から葉が伸び茎があり、花が咲く順といわれている。3色は赤(桃の花)・白(雪)・緑(草)といわれている。
- \* 26 : 共揃い : 三人官女以下の五人囃子・隋臣・従者等を共揃いという。(26～30インターネットBIGLOBE百科辞典より引用)
- \* 27 : 雛祭りの歴史(抜粋)江戸時代・・・である「雛遊び」が「雛祭り」に変わったのは天照年間以降・・・「立雛」「座り雛」(寛永雛)がつくられた。これらは男女一対の内裏雛だけの物であった。その後形は精巧さを増し、十二単の装束を着せた「元禄雛」、大型の「享保雛」になる。あまりの贅沢さに対して幕府の取り締まりで大型の雛が禁止される。それに対して「芥子雛」で対抗されたりする。その後江戸時代後期「有職雛」さらに現在につながる「古今雛」が生まれる。
- \* 28 : 内裏様の位置について・・・真中が上位でここに男雛で、その左右いづれかに女雛が位置する。ただ二人の雛の場合真中ではバランスが取れないので左右問題が出てくる。中国では西太后・皇帝・皇后の順になっている。京・西日本では伝統的に向かって男雛を右・女雛を向かって左、東京では向かって左が男雛・向かって右が女雛。日本人形協会では昭和天皇の即位以来、男雛を向かって左に置くのを「現在式」向かって右に置くのを「古式」としている。左右は何も書かなければ内裏様より南に向かってで表示。見学者の方より表す場合は向かって左・向かって右と表示する。(人形手帳65p)
- \* 29 : 雛人形の飾り方 : 29-1・段飾り等の全部を飾る飾り方、29-2段飾りの一部を飾る飾り方、29-3屏風を使用し、御在所のあり様を拝する飾り方、の三種の飾り方がある。
- \* 30 : 全国各地の珍しい飾りつけ : 30-1石段雛祭り・伊香保温泉。30-2雛祭り子供大会・埼玉県鴻巣市。30-3勝浦ビッグ雛祭り・千葉県勝浦市。3-4お雛様水上パレード・柳川市。等以下略。
- \* 31 : 衣装人形の作成過程 : 顔 : 1原型づくり→2釜いけ→3生地づくり→4桐塑詰め(生地押し)→5乾燥→6彫塑→7目入れ→8地塗り→9置上げ→10中塗り→11切り出し→12上塗り→13面相描き→14筋彫り→15毛吹き→16結いあげ→17胴組み。以下衣装関係。18布地選び→19借り衣装・裁断・縫製→20着せつけ→21振付け。(31は日本人形協会より項目のみ引用。)
- \* 32 : インターネット「暮らしの歳時記」:「冠婚葬祭」ガイド中山みゆき : より(概略)。一部問題ある記述もありますが、そのまま記します。

3 2 - 1 雛人形の由来・・人形ひとがたによる、身代わり信仰： 17 p  
古代より、人形が人形の人間の身代わりに厄やくを引き受けてくれると考えられてきました。草、わら、紙根等でこしらえた人形に自分の穢れを移し、川や海に流して厄払いをしていました。今でも行われている「流し雛」はこの名残です。また木や布で作った人形を子供の魔よけにする風習もあり、人の厄を救うために人形が重要な役割を果たしてきました。

3 2 - 2 : 人形による、ひな遊び：平安時代に貴族の子供たちの間で紙の人形でおままごとをする「雛遊び」(ひなあそび・ひいなあそび)が盛んになりました。「雛」は大きなものを小さくする、小さくてかわいらしいものという意味で、「ひな」の古語が「ひいな」です。・・・。

これらが結び付き、人の厄を受ける男女一对の紙製の立雛が誕生します。これが、いわゆる「雛人形」の原型です。やがて人形作りの技術が発展し、立派な雛人形ができてくると、ひな人形は流すものから飾るものへと変化していきました。また、上流階級では、嫁入り道具に豪華なひな人形を持たせるになり、婚礼の様子や婚礼の道具を模したものが雛飾になりました。やがて、江戸幕府によって上巳の節句(桃の節句)が五節句の一つとして女の子の節句に定められると、娘の厄を受ける雛人形はその家の財力の象徴として華やかさを増してき、豪華な雛人形を雛段に飾るようになりました。自慢の雛人形を見せ合う「ひな合わせ」や、御馳走を持って親戚を訪ねる「ひなの使い」、お雛様に春の景色を見せてあげる「ひなの国見せ」が流行し、美しい雛人形を持って「雛祭り」をすることが人々の憧れとなり、町をあげて祝うようになりました。・・・。

\* 3 3 : 「インターネット：イイハナ・ドットコム ひな祭りの歴史」より。

3 3 - 1 : 日本には昔から季節の変わり目に体を清め、厄を祓う習慣がありました。現在も残る端午や七夕をはじめとする五節句は、もとは中国から渡ってきた習慣です。古代中国では3月の最初の「巳みの日に水で体を清め、宴会を催し厄を祓うという祭りがありました。その「上巳の節句」が日本に伝わり、日本古来からあつた人形ひとがたに厄を移す風習等と混ざり合い、平安時代になると、祈祷師を呼んで祈りをささげ、人形をなでて厄を移し、供物を備えて水に流すと言った祭りが毎年行われるようになっていきました。またその頃、上流階級の女子の間で「ひいな遊び」といって、紙で作った人形と身の回り品に似せて作ったおもちゃの家財道具を「ままごと遊び」が盛んに行われたようです。平安時代の随筆や物語にもそのような場面が登場します。室町時代には上巳の節句の厄払い行事は3月3日にはほぼ定まってきましたが、この頃はまだ禊の行事として人形を流していたようです。その後戦乱の世が落ち着いた江戸時代になって、宮中行事として雛祭りが取り入れら

れ、その後大奥でも取り入れられました。そのうち上流階級のも 18 p のであったひいな遊び等が庶民に親しまれ、女の子の初節句を人形をあげてお祝いするという形が定着しました。初期には内裏雛を一對にお供え物をして祝う形が、江戸時代中期には段飾り登場し、三人官女をはじめとする付属の雛人形や雛道具が数が増えました。将軍家へのお嫁入りの際に嫁入り調度とまったく同じミニチュアを雛人形とともに持っていった例もあります。庶民の間でも3月3日が近くなると、あちこちに雛市が並び、流行を競い大変な賑わいを見せていたということです。(以下略)。

33-2：雛人形には意味とこだわりがあります：厄除けの人形ひとがた・天兒あまがつ・這子ほうこ等から出発した雛人形は最初は立ち姿が主流でした。時代を経るにつれ豪華な座り雛が主流になり、江戸時代の最盛期では豪華な金欄を使い、人形も大型化し、等身大の物も登場したようです。(以下略)

\* 33-3：**関東**は目が大きめ口元がかすかにほころびふっくらした可愛い雛が人気だそうです。**関西**ではいわゆる京美人、切れ長の目に鼻筋の通った高貴な顔が好まれます。

33-4：**三人官女**はお雛様つきの女官で、楽器を奏で、歌を詠み、家庭教師をもこなすキャリアウーマンです。。。 **五人囃子**は単なる楽団ではなく、元服前の貴族・武家（澤田追加）の子弟で、良いところをアピールすれば元服後に出世する少年です。髪型は少年の髪型です。。。

\* 34-1：インターネット：人形の町岩槻小木人形より：弥生三月は農耕民族の日本では、田植えに先立ち農耕作業の始まる大切な季節です。農作業を見守っていただける神様をお迎えし、まつたのです。農耕作に害となるものを祓い、身の穢れをも流し浄める大切さが重視され、人間の身代わりの人形ひとがたをつくり、それをなでて、人形に穢れを移して流す行事がありました。(以下略)。

\* 34-2：本居宣長は、ちいさく作ってあるので、「鳥のひなにたとえて雛」というと言っていますが、もともと京都が発祥地で「ひいな」は京都なまりとする方が自然の様です。

\* 34-3：京都で生まれた雛遊びはあくまで貴族生活の一部で、京都の雛遊びを全国にもたらした一人に春日の局があげられます。京都から江戸に雛遊びが移入され、民間でも3月3日に定期的に行うようになったのは、大体寛永の末期頃（1640）と言われています。。。雛遊びから雛祭りという呼び方に変わったのは享保（1716年）以前。江戸に移入されてからもかなりの間雛遊と呼ばれていた。

\* 34-4：雛市は開催される場所が特定されていたが、移動する雛売り移動販売の便利さがあり、二月中旬から「乗り物ほかい雛の道具」と叫んで天秤

棒で移動販売していた。この移動販売も寛政（1780）頃には雛市19pにおされてなくなった。抽象的な立雛に比べて座雛は写実的で具体的である。・・上巳の節句・雛遊と雛の対象が公家・武家にとどまっていた頃は立雛で、それが庶民の手に移り、庶民の創造から生まれたのが座雛です。しかし、座雛がつくられてすぐに立雛が無くなったのではなく、享保（1716）頃までは立雛と座雛が対等に飾られています。享保以降座雛が主・立雛が従となりました。

- \* 34-5：古今雛が従来の雛と異なる点は以下の通り。衣装に金糸・色糸を使用、鳳凰や薬玉の縫玉を加工したり、袖に紅綸子べにりんずを用いて色彩を豊かにしたことと、二畳台を据えていること、や頭が写生的に精巧を極めた点などがあります。なかでも画期的な技巧は原舟月が雛の両目に玻璃玉はりだまを嵌めこんだことです。
- \* 34-6：昭和元年、東京雛人形組合が向かって左に男雛、左に女雛を飾ることを決める。
- \* 35：代表的な雛祭りの歌：あかりをつけましょー ぼんぼりに おはなをあげましょー もものはな 五にんばやしの ふえたいこ きょうはたのしいひなまつり　：おだいらさまと おひなさま ふたりならんで すましが お およめにいらした ねえさまに よくにたかんじよの しろいかお　：きんのびょうぶに うつるひを かしかにゆする はるのかぜ すこし しろざけめされたか あかいおかおの うだいじん　：きものをきかえて おびしめて きょうはわたしも はれすがた はるのやよいの このよきひなによりうれしい ひなまつり。
- \* 36：インターネット：雛祭りの歴史や由来より。  
水辺に出て禊を行う風習は中国で行われだしました。この流れをくむ曲水の宴は秦の昭王の時代から始まったといわれています。「蘭亭序」に353年の3月3日に曲水の宴が行われた記録があり、これが日本に伝わり日本書記に485年3月宮廷儀式として行われたことが記されています。・・。奈良時代にはこの宴は盛んで、平安時代に入りますますます盛んになりました。・・。紙人形→土製人形→書き物人形→布を着せた人形と雛人形は進化しました。・・。水に流すだけでなく、置いて飾るためにも作られるようになりました。・・。3月3日以外にも小正月・端午・八朔・重陽などにも雛飾は行われ、「後の雛」と呼ばれて雛人形が使われました。
- \* 37：インターネット雛人形のこうげつ人形では下記内容のことが記されています。

37-1：雛人形の歴史：形代かたしろ→天児あまがつ・這子ほうこ→立雛・紙雛→室町雛→内裏雛→寛永雛→享保雛→次郎左衛門雛→古今雛～。

37-2：人形の文字が「ひとがた」から「にんぎょう」と呼ばれ 20p になるようになったのは、中世の頃からといわれています。それとともに「ひいな遊び」も「ひな遊び」へと表現が変化してきました。その頃、紙雛が登場する。室町風俗を写したものとされ、男雛は烏帽子、袴に小袖を左右に広げ、女雛は袖を前に重ねて細幅の帯姿のデザインでした。素材も紙から布地などを用いるになり、形代かたしろから変化したものといいますが、デフォルメされたデザインは秀逸なものです。ボディの部分は平面的な造りなので、一人で立つことは出来ず、雛段や屏風にたてかけて飾っていました。

37-3：室町雛：時代を重ねるにつれて、子供の遊び道具であった「ひいな」も、大人の鑑賞に堪える人形へと変わっていきます。「室町雛」は、現在の内裏雛に近い雛人形の形式を整えてきています。スタイルは男雛と女雛とも左右に手を広げ、お顔も天児あまがつに似た丸顔で、立雛の伝統の残る仕上がりとなっています。(以下一部略)

37-4：原舟月が作成した雛は古今集など王朝への憧れから「古今雛」と名付けられた・・・。

\*38：インターネットこうげつ人形別記載より。

38-1：お内裏様の並びは向かって左が男雛、右が女雛。これは現在の結婚式の並びと同じです。

38-2：三人官女：向かって左は銚子を持つ。右手を握って、左手を開いている。中央は座り雛で、眉毛をそっている。いわば女長官。お三宝か島台を持つ。一番右は長柄銚子で両手を握っている。

38-3：五人囃子の並び方は、能の囃し方と同じで音の大きな順です。向かって左から1・太鼓、2・大鼓おおかわ、3・小鼓こわか、4・笛、5・謡うたい。

38-4：随臣（ずいじん・ずいしん）：一般に右大臣左大臣と呼ぶが、実際には衛仕であり、武官。冠・刀・弓・背の矢・手持ちの矢をつける。

38-5：仕丁じちょう：江戸の武家風では行幸されるときにの形で、向かって左は台傘だいがさは日傘を持ち、真ん中の立て傘は雨傘、右は沓台をもっている。京都風は御所内の清掃係りの表現で、箒ほうき・熊手を持ち、ちりとりは前に置いている。

\*39：インターネット人形の町岩槻・小木人形より。

39-1：一番上はお内裏様で天皇様・皇后様の様に良縁にめぐり会えます様にとの願いで・・・。

39-2：官女・五人囃子・随身の細部の手等はインターネット等の写真で見てください。江戸の五人囃子に代わる京の五楽人の並びは向かって左から1・横笛、2・箏筑ひちきり、3・火焰太鼓、4・琵琶、5・鞆鼓かつこ。

七人の場合は1・琴、2・横笛、3・箏、4・火焰太鼓、5・琵琶 21p  
琵琶、6・笙しょう、7・鞆鼓かつこ。

39-2：緋毛氈は昔「天然痘よけ」「蚤よけ」として使用しました。

39-3：節供と節句の持つ意味：昔の人は農耕仕事が忙しくなる前の一日を集団で野山や海辺で共同飲食をする行事が三月三日や四月八日に多くありました。その風習が今のお雛様と共に賑やかに会食を楽しむことになったようです。現在は節供を節句と書く所が多いですが、本来は神様に供えた供え物自体ですが、これを行う日そのものを「せつく」としたからです。……。いろいろな供え物を神様仏様にお供えし、お祭りをして供養いたします。

39-4：菱餅：……。白は雪、邪気を祓うとされる蓬餅の緑色、桃の花の赤と待ちに待っての若葉の萌え出る頃の様子を表しています。形が尖っているということも邪気を祓う意味の名残とされています。

39-4：白酒：白酒の由来は、大蛇を宿ってしまった女性が3月3日に白酒を飲むと、胎内の大蛇を流産させる事を聞き、その様に3月3日白酒を飲むことになりました。……。邪気を祓う力とされている桃のはなびらを白酒に浮かべて飲むことは、風情ゆたか、また縁起よしとしてよくなされている飲み方です。

39-5：丸餅：赤が太陽・白が月を象徴する意味がこめられています。

39-6：雛人形を二十四節季の一つ「雨水」に飾ると良いとされる所もあります。

\*40：インターネット：雛人形の並び（フルバージョン）より。多少疑問あり。

40-1：上から一段目：内裏雛・後ろに金屏風、両脇に雪洞、二人の間に桃の花と桃花酒とうかしゆを置く。左右問題は前述：略。

40-2：二段目：三人官女：お酒をつぐ給仕役の三人。向かって左から加えの銚子、三方（供え物を載せる四角の台）、長柄の銚子の盃を持つ。（以下略）

\*41：人形小辞典：日本人形協会より以下転載・詳細略。上記で記述されている部分記載略。小辞典購入は、〒111-0052・東京都台東区柳橋2-1-9 東商センター4F。電話03・3861・3950。Fax03・3851・8248。辞典購入希望者は3冊以上Faxで注文の事。なお電話住所等は2010年3月4日現在です。

41-1：人形を保存されなくなった時は、神社等で供養（要費用）をお願いする。供養先は雛人形販売店におたずね下さい。

41-2：二女・三女等が生まれた時は、他の人形を購入し、手持ちの雛と一緒にかざる。

4 1 - 3 : 雛の宴は節句当日又は前日の宵節句に関係者一同を招待し行いま2 2 pす。出席出来なかった方への初節句のお祝い返しは、子供の名前で、お礼状に御目度いお菓子写真等を添えておく。

4 1 - 4 : 雛飾の基本は七段飾りであるが、住宅事情等で最上段だけの親王飾り（平飾り）や三人官女を加えた五人飾り（二段飾り・三段飾り）も近年流行している。七段飾りの大きさは幅1 2 0 c mが基準、高さは品物で異なる。

4 1 - 5 : 親王は他の雛よりバランス上2～3倍大き目がいい。

4 1 - 6 : 衣装人の形雛は胴（胴柄）を先に作成、その後頭部を付ける。頭部は取り外し可能。これを頭をさすという。木目込み人形は胴頭部一体で取り外し不可能。

4 1 - 7 : 衣装を裂地きれじという。金糸が入っている場合を金襴といい、京都西陣や桐生で生産されている。高級品を正絹、化学繊維と組み合わせたものを交織という。現在は化繊が多い。高級品には伝統工芸品のマークがついている。

4 1 - 8 : 頭は桐のおがくずを固めた練頭ねりがらしであったが、現在は石膏製が多い。目の入っているのを入目、目を描いているのを書目という。衣装人形は入目、木目込み人形は書目が多い。

4 1 - 9 : 京風の場合、熊手・塵取り・箒は仕丁（衛士）の前に置く。

4 1 - 1 0 : 屏風には、金屏風・絵屏風・塗屏風等があり、形状は六曲・四曲・三曲・二曲等があり、さらに角形・丸形・波型等がある。最上級品は金沢箔の本金の金箔。

4 1 - 1 1 : 雪洞：語源は「ほんのり」・雪国のかまくらの「ぼんぼりのほのかなあかり」から転化した等とされています。

4 1 - 1 2 : 嫁入り道具・お膳揃い：七段飾り＝箒筒・長持・火鉢・茶の湯道具・重箱・お駕籠・牛車ぎっしや（御所車）。三段飾り＝牛車・お駕籠・重箱・菱台・高坏たかつき・三方。又は菱台・三方の二点セット。親王飾り＝菱台・高坏・三方又は菱台・三方。普及品はプラスチック製、上級品は木製。蒔絵の程度で、中級品＝前盛上、上級品＝総盛上、極上品＝本金盛上。

4 1 - 1 3 : 段は二段、三段、五段、七段。3・5・7は中国の魔法人。

4 1 - 1 4 : もうせん・下に敷く赤布、段の場合＝段掛、親王飾り＝床飾り。レーヨンの起毛＝メルトン、ウール製＝フェルトという。

4 1 - 1 5 : 男雛の台＝親王台、女雛＝玉台。毛氈の一番下の模様を纏うんげん模様と言う。親王のみの場合＝平飾り台という。

4 1 - 1 6 : 人形の胴は通常藁。最高級品は木胴、普及品はウレタン、プラスチック製。

4 1 - 1 7 : 業界用語。女姫＝姫、男雛＝殿。一年以上前に仕入れた在庫品＝カメ、さらに古い品を大カメという。シーズンのみの販売＝際物きわもの商売・という。

4 1 - 1 8 : 胡粉：イタボガキ＝胡粉の原料。普通の牡蠣より大きい。貝殻

は十年以上天日ほしし、塩分を抜き製造、これは風化でもろくし製造23pしやすくするためです。手にいれる事は現在では難しい。日本画の白もこの胡粉。現在は他の牡蠣や他の材料で製造。

41-19：雛の価格差は大きさ・素材（木製かプラスチック製か）・塗りの程度等で決まります。漆塗りは高級品である。衣装では人絹・交織・正絹等の差。高級品では下着まで絹で製作されます。

41-20：殿上眉・引眉とは：雛人形に見られるように、眉毛がなく代わりに上に円形の点が二つあります。これを殿上眉・引眉といい、奈良～平安時代に始まった化粧法。元の眉を剃るか抜き、元の位置より高い位置に墨で長円形にかいたもの。位の高い男子の化粧法。江戸時代になり、既婚の女性が鉄漿おはぐろと一緒に取り入れていた。但し江戸後期には眉を剃った後は何もしていなかった。製作年代推定に使用下さい。

41-21：木製の塗りは上級物に成る程塗るかいすうが増える。蒔絵は手描とプリントの二種類有ります。プリント式はゴム印使用・フィルム使用・形押し等があります。

41-22：金襴とは「先染めの紋織物で、金銀糸を使い模様を出した御炉物」で室町時代末期天正年間（1573～91）頃中国より伝わる。当初大阪・堺であったがすぐに京都につたわり、西陣織として発展する。関東の桐生地方には江戸時代中ごろ伝わり現在は西陣と桐生が金襴の二大産地。西陣は戦国時代西軍の山名宗全が居た所から生まれた地名。なお金襴のグレードは絹の使用料で決まります。正絹とは100%絹を使用した織物のことです。

41-23：鎧櫃の正面に「前」と描かれているが、これは真言密教や日蓮遺文の「臨兵闘者皆陣列在前」の「前」を簡略表現したもの。

41-24：ぬき：生地ともいい、木目込み人形等の元形。桐塑ともいう。

41-25：べら：やまと人形の髪の毛のこと。

41-26：すがいと（絁糸）：人形の頭髮に用いる生糸。

41-27：絁糸葺すがぶき：生糸を用いた頭髮。

41-28：正頭しょうがしら：人物そのままの写実的な頭。子供のかむろ・ちょんぼり・かきあげ・どんずり・に対しての表現。

41-29：かむろ：少女のおかつぱ頭。おかつぱ頭。

41-30：有職織：経糸・緯糸共に絹糸を使用、平箔、金糸を使わない織物。

41-31：熨斗目のしめ：男児の晴れ姿の衣装・七五三等で着用。

41-32：人形の種類：やまと人形・市松人形いちま（いちまつ）・泣き子・ぶら・幼人形・這子・衣装人形・おやま人形・木目込み人形・舞踊人形・さくら人形・御所人形・伊豆蔵人形（御所人形の別名）・おぼこ・古代頭・浮世

物（雛人形に対しそれ以外の人形で、雛人形とともに飾られることも24 p  
ある。たとえば藤娘・汐汲・京人形・鏡獅子・石橋・翁・猩猩・七福人・  
羽衣等）。

41-33：雛道具類：三方飾・高杯たかつき・菱台・猫足形菱台・蝶足形  
膳・掛盤膳・鏡針揃・三つ揃い＝三荷さんか揃え（箆笥・長持・挟箱）・五荷  
揃え・長持・台子だいす・化粧揃・乗物揃・花車・行荷ほかい・貝桶・三棚・  
火袋・桜橘・お伽犬・白酒・段掛・口花・菱餅・火鉢・三面揃（双六盤・囲  
碁盤・将棋盤）・三曲揃（琴・三味線・胡弓）。

41-34：御殿（紫宸殿をまねた屋根付きで京風）、屋根なし（源氏枠で江  
戸風）

41-34：御膳の飾り方。右上・平椀おひら・右下汁椀・中央腰高（高坏）・  
左上壺椀・左下飯椀。

41-36：蒔絵：唐草蒔絵・三つ葉唐草・盛り上げ蒔絵・本金蒔絵。

41-37：屏風：金沢箔・絹地箔押し・絹目押し・梨子地・螺鈿。

41-38：その他：天冠・笏しゃく・石帯・裳・肩房・引房・すべらかし・  
衽付おくみつき・玉櫛・纓えい。

\*42：雛の膳：桃は中国では邪気を祓う仙木と考えられたことから、  
桃の酒を飲む習慣ができたといわれる。日本でも魔除けとして桃の木を用  
いることが多く、神符なども「桃符」と呼ばれることがある。また桃の葉は、  
汗疹あせもやただれに効きめがあり、よく浴場に入れ、これを桃湯といった。  
葉の汁を飲むと魚の中の中毒を緩和するとして、古来から用いられてきた。  
こよみ辞典224 p。

\*43：菱餅：赤の山梔子くちなしが解毒剤・白の菱が血圧低下剤・蓬は造  
血剤になっている。餅やあられには、この季節に特に補給しなければなら  
なデンプンが多く含まれている。いずれにしろ、何気ない供え物のなかにも娘  
の長命を願う心が生きている。こよみ辞典224 p。

\*44：雛飾りの左右について：前述のごとく、内裏様よりみて即ち南より  
みて左右を表示する。見学者の方より見ての表示は「向かって左、又は向か  
って右」と正式には表示する。（人形小辞典65 p）。但し雛飾り作業中は一  
般的には「左」と言えば「向かって左」で、「向かって」を略して言うことが  
多い。右も同じ。

\*45：以下「雛祭り」と雛めぐりより抜粋：（以下伊豆稲取りの関係）伊豆稲  
取のつるし飾りは一本の糸に11個でこれが五本で計55個、雛の両脇に飾る  
ので両方で110個になる。雛祭りの日を女正月という。山形県庄内地方では  
三月上旬より四月上旬まで雛祭りが開かれる。（山形関係）山形県酒田は、北前  
船で米等を京都へ運んでいたために、京の様々な文化が入り、それを最上川を

通って山形内部に伝える一大拠点だった。(大分県日田関係)江戸時代 25 p は、豪商といえども武家に遠慮してお内裏様しか持てず、初節句に贈られた歌舞伎人形や風俗人形を飾ったという。天保時代には緑の口紅がはやったため、この人形の唇も緑色だ。(宮崎県綾関係)かつて狩猟生活を営んでいた頃、巨木や奇岩等に「山の神が宿る」として尊び、家内安全を祈願したと言う。「雛山」の雛飾りはそのような精神を受け継いだ雛飾り・・・。(飛騨高山関係)大正時代半ばになると、土管や植木鉢に代わって、型でこしらえた素朴な土人形が盛んにつくられた・・・。この土人形の雛「山田焼」をかごに積んで歩く人の姿が毎年見られたという。(伊勢関係)その昔「小米雛」と呼ばれる小さな紙の雛を作り、少女たちが人形遊びをしていたという。(以下雛祭りの起源より)歴史を残す各地の雛祭り・・・高価な雛人形には手が届かなかった地方の人々は、暮らしの中で様々な素材で郷土雛をつくり・・・。「形代」水に流す「流し雛」の風習は・・・現在鳥取県の千代川せんだいがわの上流の用瀬町もちがせや奈良県吉野川上流の五条市等で行われており・・・。餅は古代から災厄を祓うと言われ・・・七夕の雛・・・西陣の七夕雛・・・五節句以外のほかにも、八朔の日(陰暦八月朔日ついたちに、稲の実り願う「田実の節句」)に各地で八朔雛が作られたという。これら秋の日を彩る雛立ちは、桃の節句に対して「後のちの雛」と呼ばれ、美しい季語として俳句の世界に残されている。(以上雛と雛めぐりより)

\* 46 : 人形の現在の製造分類 : 46-1 : 衣装人形系、46-2 : 木目込み人形系、46-3 : 土・焼き物系人形、46-4 : 紙人形系。

\*参考資料による比較検討 順不同。  
比較記載のミスは澤田までご連絡ください。

内容	書名	新編 日本人形史 (史と略す)	雛まつり (祭：と略す)	雛の宴 (宴；と略す)	雛人形 と武者 人形
寛永風雛 人形		寛永の頃より 下った頃	寛永ころ	1624～ 1772 又は元禄期以降	記載なし
元禄雛		記載なし(雛辞 典)	元禄頃で記載 71p：細部説 明有り。	写真11p・作成 年代ではない。	記載なし
有職雛		宝暦の頃17 51以降	年代記載なし	別名公家雛・大名 雛：宝暦年間以降 誕生	記載なし
享保雛		江戸時代の中 頃	享保1716 ～寛政 1800頃	1716～ 1736頃	171 6以降
次郎左衛 門		十八世紀の前 半に流行	宝暦十一年1 761～	1751～ 以降	176 1以降
古今雛		明和1764 ～	1764以降	1764～ 1772以降 又江戸期	江戸時 代後期
三人官女 の位置		記載なし	真中一番若い。 右一番年寄り	年齢記載なし	真中年 増雛
内裏雛の 位置の変 遷		昭和天皇婚儀 後	大正天皇婚儀 以降～	昭和の初め	明治以 降
雛まつり の始まり		平安時代	平安時代	平安時代の「ひい な遊び」より。又 今のようななっ たのは江戸時代 中ごろ	記載なし

市松人形と佐野川市松との関係。	<u>江戸中期裸人形を飾る。これを市松人形と</u> <u>いった。江戸後期の京の市松人形とは異なる。</u>	関係記載なし	原文「江戸時代後期の佐野川市松ににせた人形・」は「江戸時代後期に、歌舞伎役者佐野・・・」ではないか？。	関係記載なし
用語：書名	<u>新編</u> <u>日本人形史</u>	<u>雛まつり</u>	<u>雛の宴</u>	<u>雛人形</u> <u>と武者</u> <u>人形</u>
内裏様・親王雛の名称	男雛・女雛：常雛・親王雛	男雛・女雛 親王飾り	男雛・女雛	天皇皇后：男雛・女雛
這子ほうこ	室町時代記載あり・御伽這子・御伽・婢子。民間で使用	平安時代・庶民使用：雛人形誕生の一つ	年代記載なし：雛人形誕生の一つ	記載なし
天兒あまがつ	平安時代より	平安時代宮中公家で使用	時代記載なし・雛人形誕生の一つ	記載なし
御殿かざり金屏風	京：御殿飾 江戸：金屏風	金屏風。	お厨子：御殿飾り・京。金屏風・江戸。	屏風で例示
立雛	寛政二年1790記録あり。	江戸時代初期の役者ににせた人形。本来抱きかかえて遊ぶ人形が飾り人形に進化した。	雛人形の原型の紙雛が「立ち雛」の原型であり、「神雛」ともいわれ・・・。 年代未記載。	記載なし
官女かんじょ・かんじょ・女官	官女	三人官女	<u>女官仕丁</u> ・によかんしちょう・官女・三人官女・	三人官女

